ベルリン市の基礎学校段階におけるドイツ語教育の現状

水戸部修治
（教育学科教授）

1．研究の目的

ドイツ連邦共和国では，2000年のPISAショックを受けて，連邦全体で子供の読解力を向上させるための様々な取組を行ってきた。中でもベルリン市における基礎学校段階での読解力向上の取組は，我が国の国語科の授業改善にも大きな示唆を与えるものである。（注１）

ベルリン市では，その後も授業改善・教員研修を担うベルリン・ブランデンブルグ州立学校・メディア研究所（Landesinstitut für Schule und Medien Berlin-Brandenburg）（以下，LISUM）を中心に，子供たちの言語能力を高める教育課程の開発や教材開発，教員研修等に精力的に取り組んでいる。（注２）

本論考においては，現在のベルリンの市の基礎学校を取り巻く状況を明らかにするとともに，LISUMと連携して実践を行う基礎学校の授業を分析することとする。このことによって，我が国の小学校国語科の授業改善への示唆を得ることを目的とする。

2．研究の方法

⑴　LISUMにおける聞き取り調査

ベルリン市内にあったLISUMは，現在機構改革によりベルリン市に隣接するブランデンブルグ州に位置している。このLISUMを訪問し，言語教育を担当するMrs.Irene Hoppeより，近年のベルリン市の基礎学校を取り巻く状況等について聞き取り，その結果を整理する。（調査訪問日2018年２月25日）（注３）

この調査では，2017年に改訂・実施されているベルリン・ブランデンブルグ両州の言語教育分野の新学習指導要領の内容について聞き取りを行った。その結果，ドイツ語及び各教科で育成する言語とメディア利用の能力に関する学習指導要領を作成し，実施していることが分かった。またその作成に当たったMrs.Irene Hoppeから直接聞き取りを行うことで，その作成過程での趣旨や作成の経緯を明らかにすることができた。本論考ではその内容を整理することとする。

⑵　ベルリン市の基礎学校における最新の授業実践に関する情報収集

ベルリン市内の小学校，Johann Peter-Hebel-Grundschuleを視察。Mrs. Claudia Wenzelの低学年のプロジェクト学習の授業を参観するとともに，授業後その学習指導の趣旨や年間を通した実践の成果などについて聞き取った。（調査訪問日2018年２月27日）

Mrs. Wenzelは低学年の言語教育に精通しているベテラン教師である。特にプロジェクト学習においては，単元全体を通して身に付ける能力を細分化して児童にも提示し，プロジェクトの遂行に向けて，今日は何をすべきなのかが明確に分かるように児童の理解を促すなど，日本の国語教育にも資する実践情報を得ることができた。更には，一昨年の児童が１年間を通して作成したプロジェクト学習の成果を蓄積したポートフォリオを見せていただいた。これも日本の教育実践の向上に向けて非常に参考になるものと考える。

本論考においては，この実践の特徴を整理し，我が国の国語科の授業改善に生かすことのできる視点を検討することとする。

3．ベルリン市の基礎学校におけるドイツ語教育の動向

前項で述べたように，ここではベルリン・ブランデンブルグ州立学校・メディア研究所での聞き取り調査結果を整理する。

⑴　ベルリン市の基礎学校を取り巻く近年の状況

近年，移民の子供たちが急増していることに対応すべく，移民の背景をもった子供たちのための言語教育プログラム（BISS：言語と文字の教育プログラム）が大規模に進められている。これに加えて社会全体がデジタル化していることも教育に大きな影響を与えている。

⑵　学習指導要領の改訂の概要

①ドイツ語の学習指導要領

ベルリン市では，新しい学習指導要領が2017年夏の新学期から実施されている。ドイツ語の能力をA～Hまでの８段階に分けて示している。当初学年の拘束性を取り外し，子供の能力の状況に応じて指導できるようにしようという意図で作成を試みたが，学校で実践する教師の意見も取り入れて，おおむね学年段階に即して運用することとした。

なおドイツ語以外の教科においても能力をA～Hまでの８段階に分けて示す形をとっている。

②各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領

今回の改訂では，各教科で行う言語能力形成のためのカリキュラムを作成した。このようなカリキュラムはドイツ連邦でも初めてのものであると言っていいのではないか。

内容は大きく３つに分かれている。第１は，一般な留意点を述べている。第２には基礎カリキュラムであり，これは言語能力育成のためのカリキュラムとメディアリテラシー育成のためのカリキュラムで構成されている。

例えば聞く，受容する，読解力，言語意識，話すなどに分けて能力が示されている。全ての教科において言語能力の形成を進めるための教育課程であり数学，音楽などいずれの教科でも配慮し，学校において重点を置く教科などを基に，学校の教育課程で実施していることを示さなければならない。

実際の運用に当たっては現場では色々な意見があり，導入に向けて共通理解を図っている。約３年をかけて改訂作業を行ってきた。2016年に公表し，2017年の夏休み明けの新学期から導入している。

⑶　プロジェクト学習の展開

ベルリンでは，「学ぶ道のり」と呼ばれる学習指導スタイルが以前から存在してきた。その特徴としては，

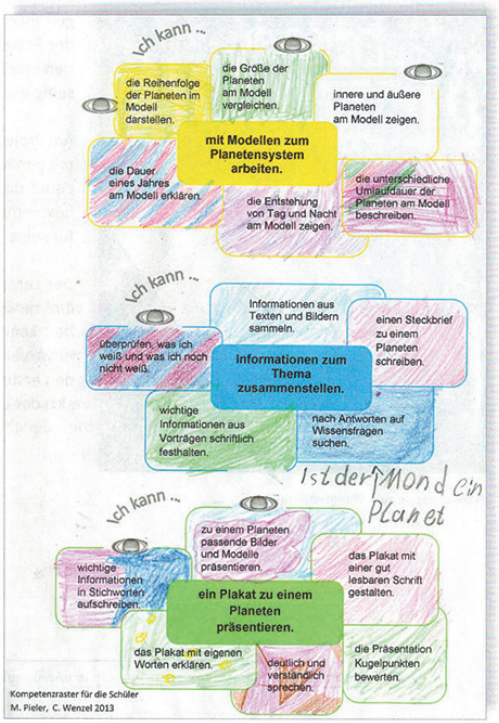
・学習の進度を子供たちにも認識できるように視覚化する。
・子供たちは共通のテーマに基づき，個々の興味・関心に応じて学びを進める。
・学習の進度に応じて，どのようなことを行っていけば学習のゴールに到達できるか，学習の過程に応じて具体的な課題を「学ぶ道のり」として提示する。

などが挙げられる。こうした学習指導においては，子供たちの自己評価が重視されている。学習の最初の段階での自己評価，学習後の相互評価などを活用し，子供たちが自立的に学習できるようになることを目指す。

具体的な例としては，理科系教科のテーマでのプロジェクト学習がある。図画工作や音楽と結び付けるなどしてプロジェクト化する。惑星についてのテーマ学習を例に挙げると，子供たちが用いる学習シートには，このプロジェクトを進めるために必要となる能力が項目ごとに挙げられ，達成できたら色で塗りつぶすようになっている。（写真１）（注４）

土星のマークがついているものは比較的取り組みやすいものである。どのような力を身に付けられたかが一目でわかる。低学年向けのプロジェクトなので低学年向けに惑星について説明したカードなどを用いる。発達段階に応じて図鑑を用いる場合もある。

こうしたプロジェクト学習は，読み書きの基礎的な能力習得の時間と並列させて設定している。ベルリンでは多くの学校が取り組もうとしているが，教員の取組によるところが大きい。



Ein ausgefüllter Lernplaner

写真１：自己評価を記載した学習シート

クロイツベルク区では区を挙げて取り組んでいるが，教員不足のため，教師によって取り組みが異なる。このような指導は経験豊富な教師でなければしにくいといった課題がある。

学習指導要領上の位置づけではなく，学校の教育課程の一環としての取組を行っている。

４．ベルリン市の基礎学校における授業実践

⑴　訪問調査対象校及び視察授業の概要

ベルリン市内の基礎学校，Johann Peter-Hebel-Grundschule を調査対象校とした。本校は，LISUM と連携して授業開発を行っており，LISUM の提案を受けた実践を行うとともに，多くの実践的知見を LISUM に提供している。

訪問当日は Mrs. Claudia Wenzel による低学年のプロジェクト学習の授業を参観するとともに，授業後その学習指導の趣旨や年間を通した実践の成果などについて聞き取った。

⑵　授業実践の特徴

①授業者

授業者である Mrs. Wenzel は低学年の言語教育について研究を重ね実践を積んでいるベテラン教師である。当日も優れた授業実践を展開していた。

②授業実践の具体的な内容及びその特徴

ア　プロジェクト学習のテーマ

今回視察したプロジェクト学習のテーマは「アフリカにおける子供の日常」というものである。アフリカ大陸における日常生活について，予想してどのようなものかを考えるとともに，ガーナからの来訪者に尋ねたり図鑑などで調べたりして，分かったことをまとめていく学習である。以下その授業の特徴を考察ししていくこととする。

イ　調べる学習を行う前の予想の明確化

本時の導入では，アフリカや欧米の写真を用いて，それぞれにアフリカの写真だと思うかどうか，またそう考えた理由は何かを確認していった。（写真２）

写真２：予想を明確にした学習

授業に参加していた低学年の子供たちは，教師の指示に基づき，自分のもっている知識や想像を働かせながら，例えば次のように予想を話した。

T1：写真を見て，アフリカにあると思うかないと思うかを予想して話してみましょう。
C1：（太鼓の写真を指して）これはアフリカの写

真だと思う。なぜなら太鼓が好きな人が多いと思うから。
C2：（テレビを指して）フラットテレビはアフリカにはないと思う。なぜなら差し込みがないと思うから。
C3：（携帯用通信端末や高層ビルの写真を指して）こういうものはアフリカにはないと思う。なぜなら豊かではないと思うから。
（以下略）

この時点では，子供たちがアフリカについてどのような知識をもっているか，どのような印象を抱いているかなどを把握することに重点を置いた指導を行っている。また子供自身も自分の先入観やまだよく分からない点を自覚することで，調べてみたいという思いを高められるようにしている。

ウ　プロジェクト学習における本時の位置づけの明示

続いて教師は次のように指示している。

T1：今まで話してくれたのは，今のみんなのイメージです。本当はどうなのかをプロジェクト学習を通してはっきりさせていきます。
　来週はガーナからのお客様がいらっしゃるのでしたね。調べてもまだ分からないことはたくさん質問できるようにしましょうね。
　では，今日はプロジェクトのここを学習します。カードにはいろいろな質問が書いてあります。知っていたら答えを書きましょう。分かったことは黄色い封筒に，分からない，もっと知りたいということは赤い封筒に入れるのですよ。（写真３）

アフリカについて疑問をもち，調べても残った疑問については，ガーナからの来訪者に直接尋ねられるようにしている。

写真３はその際に用いられた板書の様子である。教師の指示にあった黄色と赤の封筒（写真３上部）を視覚的にも分かりやすいように掲示している。

加えて，学習を進める際に必要となる能力の一覧のシートの，本時の学習の該当箇所に矢印を当て，本時がどこに当たるのかを示すようにしている。

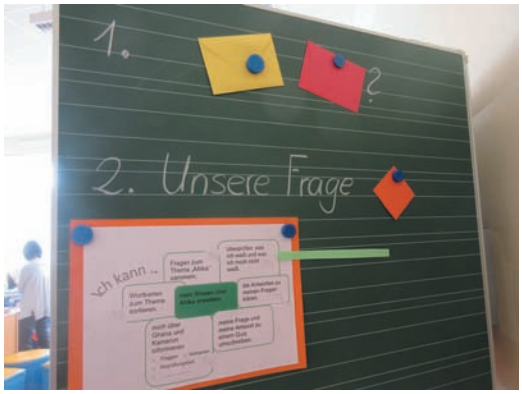


写真３：プロジェクトにおける本時の位置づけを明示する掲示の工夫

ここでは，プロジェクト学習全体のゴールに向けて，本時がどこに位置しているのかを明示する手立てが取られている。つまり，教師の指示がなければ子供たちは何をすればよいのか分からないのではなく，プロジェクト全体を見通して，ゴールに向かうために本時はここを学習していくのだということを自覚できるような手立てが的確にとられていることが分かる。

エ　調べる学習における子供たちの個々の学習の進度を明示する工夫

調べる学習においては，学級一律に進度を揃えることはせず，子供たちの個々の学習状況に合わせて進められるようにしている。

こうした個別の進度による学習展開を支えるために，写真４では，読むことの学習（Lernweg Lesen）に関する掲示の工夫がみられる。子供

写真４：個々の学習進度を明示する掲示の工夫

が好きな果物の絵柄の円形のカードを，現在学習している場所に貼り付けて，学級の子供たちの学習進度が一目でわかるように工夫されている。

オ　学習の過程で必要となる能力の明示の工夫

プロジェクトを進めていく中で言語の能力を身に付けることができるようにしている。その際，学習計画に従って，それぞれの過程でどのようなことができるようになれば先に進めるのかを子供たちが自覚できるようにすることを重視している。

写真５：学習の過程でどのような能力が必要なのかを明示する掲示の工夫

そのため，教室の側面の掲示（写真５）や，写真１に示した子供の自己評価シートなどには，どのようなことができればよいのかを見通して学習を進めたり，学習してどのようなことができるようになったのかを自覚したりできるような工夫が施されている。

単に活動だけで学習が進むことのないように，確実に能力が身に付くようにするための工夫である。

カ　学習成果を形にする工夫

今回視察したプロジェクトの成果は，学習の過程で作成した学習シートなどとともに一つにまとめられて，形あるものとして残すように工夫されている。

今回の視察では，Lapbook と名付けられたツールとしてまとめられていた。写真６は，２年前の子供たちが作成した Lapbook である。

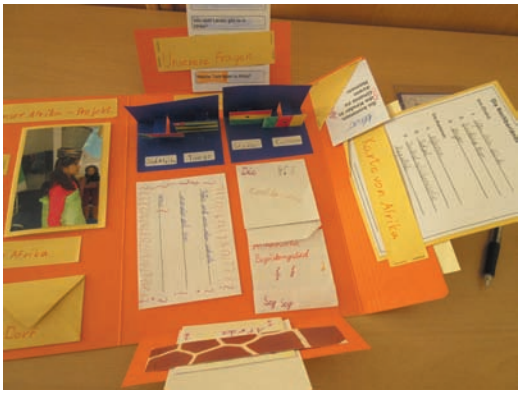


写真６：学習成果をまとめる Lapbook

Lapbook には，自分が調べたり聞き取ったりした内容をまとめたカード類を貼り付けて保管できるようにしている。こうした作品を用いて互いに学習したことを発表し合うなどして用いる。さらに，子供たちが学んだ成果を自ら実感したり，次のプロジェクトを進める際に見返して役立てたりするなど，様々に活用することが可能である。

キ　年間の学習成果をまとめたファイルの活用

各プロジェクトで Lapbook などにまとめられた学習の成果は，更に通年で一冊のリング式ファイルにまとめられ保管されていた。

教室には，子供一人一人の学習成果をまとめたファイルが棚に置かれており（写真７），学習を進める際に実際に手に取って見返すなどして活用する姿が見られた。

このリング式ファイルに学習成果を蓄積する際には，Lapbook のような立体的なリーフレット型ツールはそのまま収めることができないため，写真に撮ってファイルに貼り付ける工夫がなされていた。（写真８）

またこのファイルには，Lapbook にまとめた成果のみならず，プロジェクト学習における能力を示したシート（写真９）なども併せてファイルするようになっており，自分が身に付けた能力を振り返ることができるようにしている。

更に自己評価に加えて相互評価の結果などもファイルするように工夫されている。写真10で

写真７：子供一人一人の学習成果をまとめたファイル

写真８：Lapbook などは写真に撮って蓄積

写真９：ファイルに蓄積するプロジェクトの能力シート

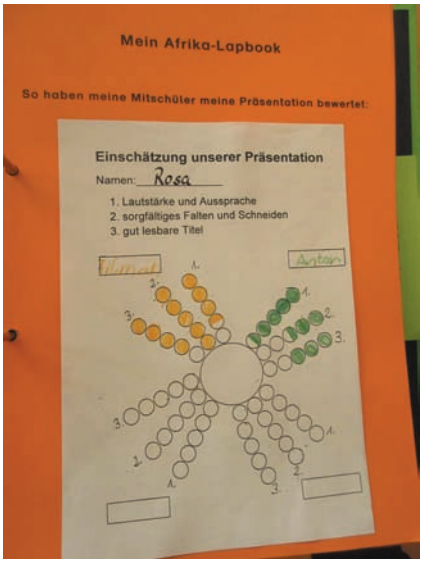


写真10：ファイルに蓄積する相互評価シート

は，プレゼンテーションについての相互評価項目を以下のように設定し，友達からの評価を得てそれを蓄積するようになっている。

1	大きな声ではっきりと話す。
2	資料を丁寧に折ったり切ったりしている。
3	タイトルが読みやすい。

前掲の１～３の相互評価項目について，どの程度できていたかを色を塗って示している。４人まで相互評価を求められる形式になっている。

５．考察

⑴　ベルリンの新学習指導要領

本調査の結果，ベルリンにおいては我が国とほぼ同時期に新学習指導要領が作成され，実施されていることが分かった。またその作成過程においては，能力ベースの示し方を前面に打ち出していることや，小中学校の系統性を従来以上に重視していることが分かった。こうした点は，我が国の動向と共通点が多い。

一方，言語能力の系統性を明確に打ち出し，学年進行に基づきながらも，より個々の子供の実現状況に合わせた指導ができるようにしている点は，移民が増加するなどドイツの現状を踏まえた改訂となっていることが分かる。

今回の調査で新たに明らかになったのは，各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領が作成されていることである。管見ではこの点について考察した我が国の論考は見られない。我が国においては平成20年版の学習指導要領において各教科等での言語活動の充実を図ることとされたが，言語活動自体が目的化したり，反対に言語活動の位置付けを躊躇してしまったりする状況も見られる。平成29年の改訂においても引き続き言語活動の充実が位置付けられていることから，指導のねらいを実現する質の高い言語活動の工夫が期待される。（注５）

この点において，ベルリンで実施されている言語とメディアの学習指導要領が我が国の学校教育における言語能力の育成やそのための教育課程の編成に大きな示唆を与えてくれるものと考える。そのため今後この学習指導要領がどのような特徴をもつのかを解明することが必要になると考えられる。

また今回の調査の時点では，学習指導要領は実施されているものの実情としては周知を図り，研修を進めている段階であるとのことであった。そこで，引き続きベルリンにおける実際の運用状況を把握することが必要であると考える。

⑵　見通しをもって学ぶ指導の在り方

LISUM と協働して授業開発を進める Mrs. Claudia Wenzel の授業は，我が国の優れた教師による授業づくりとも共通点が多い。特に，単元全体の学習の見通しを明確にし，子供が単元のゴールに向かって，本時の学びがどう位置付き，どのような価値をもつのかを把握できるようにする手立てなどは，近年の我が国の実践でも見られるようになってきたところである。

一例を挙げると，近年学力の向上がめざましい沖縄県で，子供が単元における学習の見通しを立てやすくするため，単元の学習計画表を学年で統一して掲示している実践が見られる。この計画表を活用し，単元のゴールは何か，そのゴールに向かって本時は何を学ぶのかをはっきりと捉えられるようにしている。（注６）

こうした指導の工夫は，単元を通して言語活動を位置付け，子供たちが見通しをもって主体的に学べるようにするために広がってきたものである。ベルリンのプロジェクト学習の実践も同じ方向性をもつものであることが伺える。

⑶　学習成果の蓄積と活用

ベルリンの実践では，Lapbook 等が活用されていた。こうした学習の成果をリーフレット型ツールにまとめて発信する指導の工夫はベルリンの実践にヒントを得て，我が国の読むことの学習でも広がりを見せているところである。（注７）更に，年間の学習成果について，リング式ファイルに綴じて蓄積する実践についても，沖縄県の実践事例などで見られ始めるようになってきた。（注８）今後一層こうした取組を拡充することが望まれる。

⑷　能力を明確にした学習と個に応じた学習展開

今回調査したベルリンの実践で大きな特徴としてあげられるのは，プロジェクト学習のゴールに向けて，学習過程でどのような能力を身に付ければよいのかを教師だけではなく子供も共有できるようにしている点である。

我が国の国語科の学習指導では，現在も依然として教材への依存度が高く，授業改善が求められるとの指摘もある。（注９）

国語科の学習指導が資質・能力を育成するものになるようにするためには，単元で育成を目指す資質・能力を明確にするとともに，その育成にふさわしい言語活動を位置付けることが必要である。その際の課題として，資質・能力を育成するための言語活動の選定が難しいという点が挙げられる。こうした課題を克服する際の手掛かりとして，単元のゴールに向かうために各単位時間に必要となる能力を子供と共有するという工夫は大きな示唆を与えるものと思われる。こうした工夫の具体化に当たっては，単に必要となる能力を教師から一方的に子供に下ろすのではなく，子供も単元のゴールに向けて必要性を意識したり，能力を身に付けたよさを実感したりできるようにする工夫が重要になるだろう。また，能力は言語活動に比べて抽象的な概念であるため，発達の段階に応じて子供がとらえやすいようにする共有の仕方も重要になる

ものと考えられる。

もう一点特徴として挙げられるのは，子供一人一人の学習の進度の違いが許容されている点である。我が国ではなかなかこうした実践は実現しにくい傾向にある。これは一学級当たりの定員の違いなども大きく影響すると考えられる。また，学校や授業者によっては，一律に進度をそろえた方がよいと考える場合もあるだろう。

しかし，ある程度長いスパンで言語活動を行う中では，子供たちの学習の進度に違いが出てくる場合も多く見られる。子供たちの自己評価を十分生かすとともに，一人一人の進度を掲示の工夫によって一覧できるようにすることなどは，授業改善においても有効な手立てになるものと思われる。

6．展望

今回の調査によって，ベルリンの新学習指導要領に関する情報を得るとともに，優れた実践の具体的な手立てについて整理・分析することができた。今後，学習指導要領については内容をより詳細に分析するとともに，その実際の運用状況を把握する必要がある。

また実践の手立てについては，我が国の国語科の教育課程に適合した形で導入を試みる必要がある。

なお本論文は，JSPS 科研費 JP17K04833の助成を受けたものである。

（注１）水戸部修治「日本版『PISA スーツケース』の開発に関する基礎的研究」『山形大学紀要（教育科学編）第14巻第３号』pp. 265－275，2008

（注２）水戸部修治「ベルリン市の基礎学校における『PISA スーツケース』の活用状況と日本版開発の可能性」『国立教育政策研究所紀要第138集』pp. 183－193，2009

（注３）LISUM，Johann Peter-Hebel-Grundschule の訪問調査に当たっては，通訳者那須田栄氏に大きなご尽力をいただいた。

（注４）写真１は Mechthild Pieler，Claudia Wenzel『UNTERRICHTSENTWICKLUNG』LISUM p. 33，2013による。

（注５）水戸部修治『小学校国語科　質の高い言語活動パーフェクトガイド５・６年』pp. 8－10，2018，明治図書

（注６）水戸部修治「沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因に関する基礎的考察」『京都女子大学「発達教育学部紀要」第14号（１）』pp. 11－18，2018

（注７）水戸部修治「PISA スーツケースで読書力向上～ドイツ・ベルリン市の読書力向上のための教材集～」『教育科学国語教育№762』，pp. 32－35，2013

（注８）注６に同じ。この論考では，沖縄県名護市立名護小学校の「お宝ファイル」の取組を紹介した。

（注９）中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016，第２章１（１）①